和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報

- 平成20年度(2008年度)-

2011

財団法人 和歌山市都市整備公社

序 文

本書は、財団法人和歌山市都市整備公社が平成20年度(2008年度)に行った和歌山市内の遺跡発掘調査の概要をまとめたものです。

調査の結果、川辺遺跡において弥生時代中期の竪穴建物や奈良時代の溝などを確認しました。太田・黒田遺跡の調査では、弥生時代中期から近代に至る多くの遺構を確認しました。特に、弥生時代中期の竪穴建物や掘立柱建物、土器棺墓などはムラや墓域の広がりを示す貴重な資料です。また、本遺跡では初めての方形の横板組井戸枠を用いた奈良時代の井戸が発見されました。田屋遺跡では、古墳時代の掘立柱建物や溝などを確認しました。釜山古墳では外堤の葺石や古墳の周濠底面の標高及び残存している周濠上端の幅を確認し、築造時の古墳復元案を提示することができました。史跡和歌山城においては、『和歌山城御城内惣御絵図』などの絵図に描かれた二の丸(大奥)の建物の礎石などを確認しました。

以上、当財団の調査による新たな調査成果は、郷土の歴史を語る上でなくては ならない重要な視点を与えることになりました。本書が私たちの郷土に関する歴 史知識を豊かにすることを願ってやみません。

発掘調査にあたって御協力をいただいた地元の皆様及び本書編集にあたり種々の御教示を賜りました方々に厚く御礼申し上げます。

平成23年(2011年) 3月15日

財団法人 和歌山市都市整備公社 理事長 垣 本 省 五

例 言

- 1. 本書は、平成20年度(2008年度)に財団法人和歌山市都市整備公社が実施した和歌山市内における埋蔵文化財発掘調査事業の概要を掲載する。
- 2. 本書に掲載の調査については、既に報告書が刊行されたものもある。未完のものについては報告書が刊行された際に、その報告をもって正式報告とする。
- 3. 本書の執筆については、執筆分担の文責を文末に記載し、編集は奥村 薫が行った。
- 4. 埋蔵文化財発掘調査及び本年報作成を行った担当者は以下の通りである。

埋蔵文化財発掘調査

【平成20年度(2008年度)】

財団法人和歌山市都市整備公社

事務局 埋蔵文化財班

班 長(学芸員) 北野隆亮

主 查(学芸員) 井馬好英

主 任(学芸員) 奥村 薫

主 任(学芸員) 藤藪勝則

年報作成

【平成22年度(2010年度)】

財団法人和歌山市都市整備公社

事務局 埋蔵文化財班

班 長(学芸員) 北野隆亮

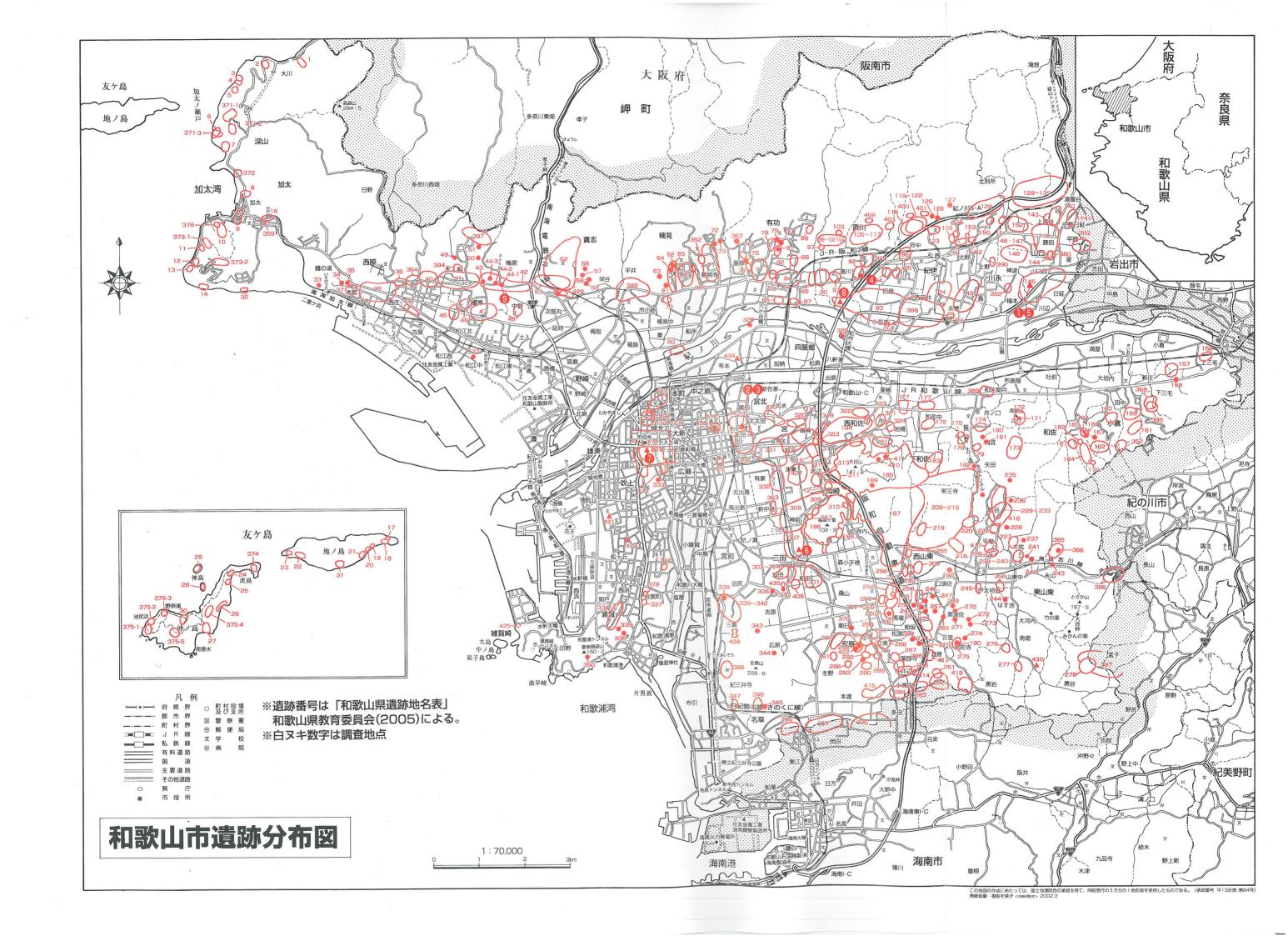
主 查(学芸員) 井馬好英

主 任(学芸員) 奥村 薫

主 任(学芸員) 藤藪勝則

本文目次

1. はじめに
平成20年度(2008年度)の調査
Ⅱ. 埋蔵文化財の発掘調査概要
1. 川辺遺跡第9次調査 2
2. 太田·黒田遺跡第60次調査······ 4
3. 太田・黒田遺跡第61次調査6
4. 鳥井遺跡発掘調査10
5. 川辺遺跡第10・11次調査14
6. 神前遺跡第5次調査18
7. 史跡和歌山城第31調査22
8. 田屋遺跡第2次調査28
9. 釜山古墳発掘調査32
Ⅲ. 普及啓発活動·······34



和歌山市遺跡地名表(「和歌山県遺跡地名表」和歌山県教育委員会 < 2005 年 > より作成。)

遺跡番号	名称	遺跡番号	名	称 遺跡番	号 名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名 称
1	報恩講寺遺跡	47	榎 原 遺	跡 98~102・	04 北 山 古 墳 群	170	奥 池 遺 跡	255	吉礼Ⅲ遺跡	306	坂田地蔵山古墳	358	山 東 中 遺 跡	394	城 山 遺 跡
2	大川西方遺跡	48	中 野 遺	跡 103	北山Ⅱ遺跡	171	高 積 山 遺 跡	256	千 石 山 遺 跡	307	神 前 遺 跡	359	加太Ⅱ遺跡	395	岡村遺跡
3	藻 江 遺 跡	49	城 山 古	墳 105~1	7 直川八幡山古墳群	172	薬 徳 寺 跡	257 ~ 259	井 戸 古 墳 群	308	井 辺 遺 跡	360	雨 が 谷 遺 跡	396	室山古墳群
4	しょうぶ谷遺跡	50	権 現 山 1 号	墳 118	八王寺山古墳群	173	城ケ峯城跡	260	馬場古墳群	309	岡崎縄文遺跡	361	冬 野 遺 跡	397	木ノ本IV遺跡
5	水 谷 遺 跡	51	権 現 山 2 号	墳 119	橘谷I遺跡	174	禰 宜 Ⅰ 遺 跡	261	馬 場 遺 跡	310	森小手穂埴輪窯跡	362	鳴 滝 遺 跡	398	府中IV遺跡
6	男良の谷遺跡	52	高 芝 遺	跡 120	橘 谷 Ⅱ 遺 跡	175	禰 宜 Ⅱ 遺 跡	262 ~ 265	東池古墳群	311	大日山I遺跡	363	園部円山古墳	399	平 井 遺 跡
7	深 山 遺 跡	53	高 芝 古 墳	群 121	橘 谷 Ⅲ 遺 跡	176	禰 宜 貝 塚	266	吉里銅鐸出土地	312	井 辺 I 遺 跡	364	西 庄 Ⅱ 遺 跡	400	深谷池北遺跡
8	大 谷 川 遺 跡	54	栄 谷 貝	塚 122	橘谷銅鐸出土地	177	河南中学校北方遺跡	267	小 山 古 墳	313	井 辺 Ⅱ 遺 跡	365	永 山 遺 跡	401	名草池北遺跡
9	加 太 遺 跡	55	貴 志 古	墳 123	弘 西 遺 跡	178	和 佐 中 遺 跡	268	奥 須 佐 窯 跡	314	鳴 神 Ⅱ 遺 跡	366	永 山 古 墳	402	湯谷池西遺跡
10	加太南遺跡	56	川原崎遺	跡 124	北 田 井 遺 跡	179	和 佐 寺 跡	269	円 満 寺 古 墳	315	鳴 神 Ⅲ 遺 跡	367	井 辺 皿 遺 跡	403	平野池南遺跡
11	平 の 谷 遺 跡	57 ~ 59	川原崎古墳	群 125~1	7 別 所 古 墳 群	180 • 181	禰 宜 古 墳 群	270	峯 古 墳	316	鳴神IV遺跡	368	紀三井寺遺跡	404	北野池北遺跡
12	田倉崎Ⅰ遺跡	60	国 有 本 遺	跡 128	上 野 古 墳 群	182	和 坂 古 墳	271	西光寺窯地	317	鳴神貝塚	369	奥 山 田 遺 跡	405	山吹丁遺跡
13	田倉崎Ⅱ遺跡	61	大 谷 古	墳 129~1		183	和 佐 古 墳 群	272	吉里1号窯跡	318	鳴神V遺跡	370	朝日石槍出土地	406	友 田 町 遺 跡
14	船 出 遺 跡	62.64.65	晒 山 古 墳	群 140	山 口 廃 寺 跡	184	花 山 古 墳 群	273	吉里2号窯跡	319	音 浦 遺 跡	371	深山要塞跡	407	津 湊 Ⅱ 遺 跡
16	加太駅北方遺跡	63 •	慶円寺裏山古	墳 141	中筋日延遺跡	185	岩橋千塚古墳群	274	頭陀寺古墳	320	鳴神VI遺跡	371 – 1	深山第1砲台跡	408	和 田 Ⅱ 遺 跡
17	藻崎北浜遺跡	66	雨が谷古墳	群 142	山口遺跡	186	井辺前山古墳群	275	頭陀寺遺跡	321	岩 橋 遺 跡	371 – 2	深山第2砲台跡	409	岩橋 🎞 遺跡
18	藻崎南浜遺跡	70		跡 143	谷 遺 跡	187	寺 内 古 墳 群	276	大 将 軍 窯 跡	322	栗 栖 Ι 遺 跡	371 – 3	男 良 砲 台 跡	410	前山B 226 号墳
19	藻崎西浜遺跡	71	鳴 滝 古 墳	群 144	里遺跡	188	森小手穂遺跡	277	有ノ木窯跡	323	栗 栖 Ⅱ 遺 跡	372	加太砲台跡	411	前山B 227 号墳
20	神前東浜遺跡	72	奥 出 古	墳 145	川辺遺跡	189	寺内ナイフ形石器出土地	278	宝 光 寺 跡	324	高橋神社遺跡	$373 - 1 \cdot 2$	田倉崎砲台跡	412	城 ノ 前 1 号 墳
21	神前西浜遺跡	73	有 功 経	塚 146	藤田古墳		頭陀寺ナイフ形石器出土地	279 • 280	松原古墳群	325	紀の川銅鐸出土地	374	虎島砲台跡	413	境 原 遺 跡
22	屋敷浜遺跡	74		跡 147				281	滝ヶ峯古墳群	326	有本銅鐸出土地	375	友ヶ島要塞跡	414	薬 勝 寺 Ⅱ 遺 跡
23	おそ越の鼻遺跡	75		墳 148	藤田遺跡	218	若林古墳群	282	滝ヶ峯遺跡	327			友ヶ島第1砲台跡	415	本 渡 遺 跡
24	一谷色遺跡	76		跡 149	宇田森遺跡	219	吉礼砂羅谷窯跡	283	薬勝寺南山古墳群	328			友ヶ島第2砲台跡	416	明王寺遺跡
25	柏の浜遺跡	77		跡 150	上野廃寺跡(紀伊薬師寺跡)		平尾古墳群	284	仁 井 辺 遺 跡	329			友ヶ島第3砲台跡	417	平尾遺跡
26	深蛇池遺跡	78	池田遺	跡 151	上野遺跡	226	楠古墳群	285	薬勝寺跡	330			友ヶ島第4砲台跡	418	滝ヶ峯Ⅱ遺跡
27	垂 水 遺 跡 神 鳥 遺 跡	79		墳 152	上黑谷遺跡		足守神社古墳群	286	薬勝寺遺跡	331			友ヶ島第5砲台跡	420	太田城水攻め堤跡
	11 23 22 23		大同寺墳				赤山古墳		松原I遺跡				行者堂東遺跡		
	沖の島北方海底遺跡 野 奈 浦 遺 跡	81 82	大同寺古		北野 遺跡			288	松原Ⅱ遺跡	333	岡の里遺跡	377	松江経塚	422	朝日蔵骨器出土地
1	ハイブの浦遺跡	83	法然寺遺		若宮池遺跡		新 出 古 墳 明 王 寺 経 塚	289	薬 師 谷 遺 跡 江 南 遺 跡	334	関 戸 遺 跡 墳	378	猊口石岩陰遺跡 和 歌 山 城 跡	423	上黒谷Ⅱ遺跡東田中遺跡
32	浜 遺 跡	84	六十谷遺		上三毛遺跡	236	矢 田 古 墳	291	江 南 遺 跡	336	関 戸 古 墳 天 神 山 古 墳	379 380	山口御殿跡	424	一
		85		跡 157	下三毛遺跡		北池古墳	292		337	秋葉山貝塚	381	日日曜殿跡	426	小豆島西遺跡
37	磯脇遺跡	86		跡 158			殿山古墳群	293	曽垣田古墳	338	アンドの鼻古墳	382	本願寺跡	427	岩橋高柳遺跡
38	西 庄 遺 跡	87		跡 159	寺山古墳群		土井山古墳	294	城の前Ⅱ遺跡			383	神前』遺跡	428	和坂南垣内古墳群
	平の下遺跡	88	六十谷古墳		東国山古墳群		丸山古墳	295	城の前Ⅰ遺跡	343	吉原古墳	384	高松焼窯跡	429	栄 谷 遺 跡
	木ノ本Ⅰ遺跡	89		跡 161	宮山古墳群		高岡古墳	296	大池遺跡	344	広原古墳	385	奥山田古墳群	430	西庄皿遺跡
	木ノ本Ⅱ遺跡	90	直川廃寺跡(明光寺)		小倉古墳群		桜山古墳	297	赤津古墳群	345	内原古墳	386	大 池 遺 跡	431	砂山南土師器出土地
	木ノ本Ⅲ遺跡	91		跡 163	小 倉 9 号 墳		伊太祈曽神社古墳群	298	吉礼貝塚	346	内原遺跡	387	大旗山城跡	432	旧聖社境内和鏡出土地
1 1	木ノ本経塚	92		跡 164	明楽古墳群		チショ古墳	299	西吉礼遺跡	347	名 草 貝 塚	388	西田井遺跡	433	今福尖頭器出土地
	釜 山 古 墳	93		跡 165	小倉神社1号墳			300	東吉礼遺跡	350	高津子山古墳	389	井ノ口遺跡	434	有本土器出土地
	車駕之古址古墳	94	府 中 Ⅱ 遺	跡 166	小倉神社2号墳		城ヶ森遺跡		和田遺跡	352	金谷廃寺跡	390	神波遺跡	435	坂 田 遺 跡
1	茶臼山古墳	95		跡 167	モント古墳群		相 坂 古 墳		和田岩坪遺跡	353	興 徳 寺 跡	391	永 穂 遺 跡	436	三葛遺跡
45	木本小学校 I 遺跡	96	府 中 遺	跡 168	小倉神社境内遺跡	252 · 253		1		356	太 田 城 跡	392	楠本遺跡	指1	史跡和歌山城
46	木本小学校Ⅱ遺跡	97	北山I遺	跡 169	金谷遺跡				竈山神社古墳	357	山崎山古墳群	393	吉 田 遺 跡		

I. はじめに

平成20年度 (2008年度) の調査

和歌山市における平成20年度(2008年度)の財団法人和歌山市都市整備公社の発掘調査受託事業は9件、出土遺物整理受託事業が3件である。

調査に至った原因としては、店舗建設などの民間受託が4件に対して遺跡範囲確認調査などの公 共的な調査が7件を数え、前年度とほぼ同じ傾向である。特に公共関係の調査は確認調査が主体を 占めたといえる。

公共関係の調査では、史跡和歌山城二の丸(大奥)などの史跡整備関連調査が行われた。これらの調査で、いくつかの重要な成果が得られているので以下にまとめることとする。

縄文時代 川辺遺跡第10・11次調査で後期の遺物包含層を確認した。

弥生時代 太田・黒田遺跡第61次調査で前期末の土器棺、中期前半の井戸・土坑、中期の棟持柱を持つ掘立柱建物や竪穴建物の他、溝、土坑及び土器棺、後期の溝や土坑などを確認した。川辺遺跡第10・11次調査において、中期の竪穴建物3棟、溝状遺構などを確認した。

古墳時代 川辺遺跡第10・11次調査で初頭頃の大溝、太田・黒田遺跡第61次調査で前期の井戸、後期の溝や土坑などを確認した。田屋遺跡第2次調査で前期の溝や土坑、中期の掘立柱建物、後期に埋没した溝などを確認した。釜山古墳では外堤葺石や古墳周濠底面の推定標高及び残存周濠上端幅を確認し、築造時の古墳復元案を提示できた。

奈良時代 太田・黒田遺跡第61次調査で横板組方形井戸枠を用いた井戸や溝を検出。川辺遺跡第10・11次調査において溝を検出。

平安時代 田屋遺跡第2次調査で前期に埋没した溝などを確認した。

鎌倉時代 太田・黒田遺跡第61次調査で井戸や溝を検出した他、神前遺跡第5次調査で鎌倉時代の 遺構面を確認した。

江戸時代 史跡和歌山城第31次調査において、『和歌山城御城内惣御絵図』に描かれている二の丸 (大奥)の礎石建物などを確認した他、川辺遺跡第10・11次調査において溝を検出した。

【2008年度調査一覧表】

番号	調査名	原 因	調查期間	面積(m²)	調査概要	担当者名
1	川辺遺跡第9次調査	確認調查	2008.5	90	対象地各所において弥生時代から奈良時代にかけての遺構を確 認。	井馬
2	太田·黒田遺跡第60次 調査	確認調査	2008.5 ~6	40	弥生時代中期初頭から前葉、弥生時代中期前葉から奈良時代、鎌倉時代以降の遺構面を3面確認。	藤藪
3	太田·黒田遺跡第61次 調査	開発計画	2008.7 ~11	644.4	弥生時代前期末の土器棺、中期前業の井戸及び土坑、中期の掘立 柱建物や竪穴建物の他、溝、土坑、土器棺、後期の溝や土坑、古 墳時代前期の井戸、後期の溝や土坑、飛鳥時代の井戸などの他、 多数のピットを検出。	藤藪
4	鳥井遺跡発掘調査	確認調查	2008.8 ~9	40	平安時代、鎌倉時代の遺構面を2面確認。調査地南半では水田耕土とみられる堆積を確認。	北野
5	川辺遺跡第10・11次調 査	開発計画	2008.10 ~2009.2	159.8	縄文時代後期の包含層、弥生時代中期の竪穴建物3棟や溝状遺構、 古墳時代初頭頃の大溝、奈良時代や江戸時代の溝の他、古墳時代 に埋没した自然河道と考えられる大規模な落ち込みなどを確認。	井馬
6	神前遺跡第5次調査	確認調査	2008.9 ~10	50	弥生時代中期から鎌倉時代までの遺構面を確認。	北野
7	史跡和歌山城第31次調查	史跡整備	2008.11 ~2009.3	526	吹上口と二の丸西部の調査。吹上口の調査では、西堀の南面石垣 を確認した。二の丸の調査では、大奥の範囲で礎石建物の下部構 造(根石)や土塀基礎石組・石組溝・石組集水枡などを検出。	北野·
8	田屋遺跡第2次調査	開発計画	2009.2	201.25	古墳時代前期から平安時代前期にかけての掘立柱建物や土坑及 び、溝などを検出。	藤藪
9	釜山古墳発掘調査	確認調查	2009.3	46	外堤葺石、推定ではあるものの古墳周濠底面の標高及び残存周濠 上端幅を確認し、築造時の古墳規模を推定。	井馬

Ⅱ. 埋蔵文化財の発掘調査概要

1. 川辺遺跡 第9次調査

調 查 地 和歌山市里字五段 6 番地 他 調查面積 90㎡

位置と環境

川辺遺跡は、紀ノ川の河口から約12km上流の北岸に位置し、和泉山脈の南麓、紀ノ川との間に形成された標高11~12mを測る平野部の微高地に立地し、遺跡の北西部は和泉山脈から南に張り出した扇状地上に形成されている。そして遺跡中央部は、この扇状地を形成する砂礫層と沖積作用によって堆積したシルト質土の境界部分となり周囲よりやや低い微低地となっている。

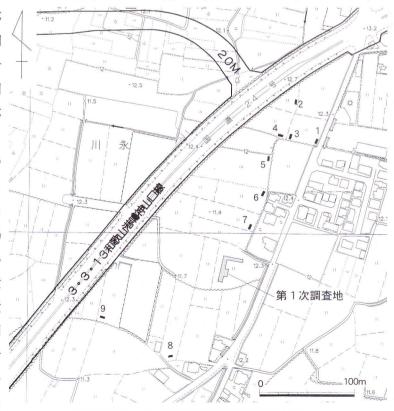
当遺跡では、これまで縄文時代晩期の土器棺墓や弥生時代中期の竪穴建物、方形周溝墓、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴建物、古墳時代後期末から飛鳥時代にかけての竪穴建物や掘立柱建物、中世の掘立柱建物や土坑墓など多数の遺構を検出し、遮光器土偶などを含む多量の遺物が出土している。今回の調査は、一般国道24号バイパス東側の水田及び畑地における大規模開発計画を起因とする事前の確認調査として行ったものである。

調査内容

調査は、川辺遺跡の中央部における開発計画範囲約20,000㎡の内、東及び南縁辺部にあたる擁壁 工事路線を対象に幅2m、調査区長5mの調査区を9ヶ所設定して行った。

調査地の現況は、大半が水田であり、一部に休耕田である荒蕪地が含まれている。調査地の基本

層序については、当財団が行った第 2~6次調査の層序を参考に、各調 査区の対応関係を考えて層位番号 を付した。なお、各層位の堆積時期 は、上位から現代の水田耕作土(第 1層)、江戸時代の耕作土(第2層)、 室町時代から江戸時代にかけての 耕作土(第3層)、鎌倉時代の堆積と 考えられる褐色の鉄分粒を多量に 含むことを特徴とするにぶい黄褐 色系の粗砂混シルト(第4層)、飛鳥 時代から平安時代にかけての堆積 土 (第5層)、弥生時代後期の堆積 土 (第6a層) の他、弥生時代中期 と考えられる堆積土 (第6b層) で ある。また今回の調査では遺物の 出土は認められなかったものの、縄



調査位置図(数字番号は調査地区番号を示す。)

文時代晩期の堆積層と考えられる第6c層を第1・3・7・8区で検出した。

今回の調査では大半の調査区において様々な時期 の良好な遺構を検出した。第1区では最も新しい時 期である江戸時代の溝を第3層上面において検出し た。また第2区では第5層上面及び第6a層上面の 2面の遺構面を検出した。この第6a層上面の検出 では、第4・5区においても溝を、第8・9区にお いても溝や土坑を検出した。また第3・4区では、 下層の状況確認のため設定したサブトレンチ内部 の第6b層上面において弥生時代と考えられる遺構 を検出した。この中で特筆すべきものとして、第2 区では鎌倉時代頃とみられる幅30~40cmの南北方向 の溝1条と東壁直下に長さ2.2m以上の規模をもつ 土坑1基がある(写真1)。また第4区では第6a層 上面で幅90cm以上、深さ60cm前後の溝1条とさらに 下層の第6b層上面において弥生土器が一定量出土 した長さ1.2m以上の土坑1基を検出した(写真2)。 第5区では第6a層上面において幅0.7~1.0mの南北 方向の溝1条とその溝に流れ込むとみられる幅30cm の溝を検出した(写真3)。これらの溝の時期とし て、遺物の包含は少なく具体的な時期は不明である ものの、古墳時代から奈良時代までの範疇に収まる ものと考えられる。さらに、第8区では第6a層上 面において調査区を斜めに横切る幅40cm程度の東西 方向の溝1条を検出した(写真4)。

まとめ

今回の調査目的は、工事計画範囲における遺構の 有無等を確認するために実施した確認調査であっ た。その目的からみれば、第6・7区を除く7区画 において様々な遺構を検出し、良好な成果を得たも のといえる。また第7区の約35m南側に位置する第 1次調査では弥生時代中期の竪穴建物など集落に関 わる遺構が確認されており、第6・7区周辺にも遺 構分布が充分に考えられる。(井馬好英)

【参考文献】『和歌山市内遺跡発掘調査概報』—平成20年度 — 和歌山市教育委員会 2010年

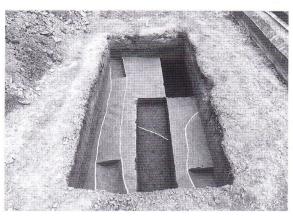


写真1 第2区全景(北から)



写真2 第4区全景(西から)

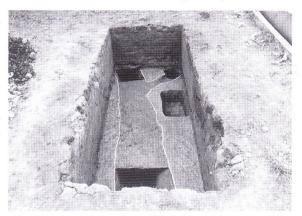


写真3 第5区全景(南から)



写真4 第8区全景(東から)

2. 太田·黒田遺跡 第60次調査

調 **査 地** 和歌山市黒田字池ノ首75番地1・3地内 調**査面積** 40㎡

位置と環境

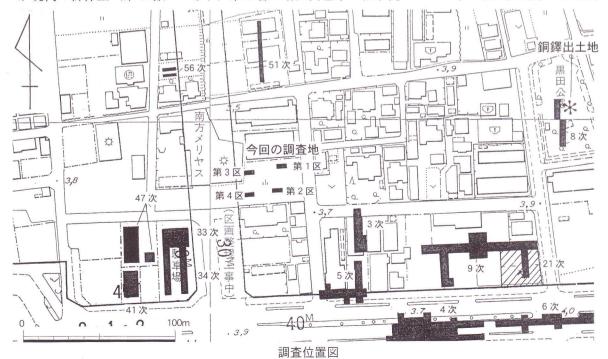
太田・黒田遺跡は、東西500m、南北850mの範囲をもつ弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。そのなかでも弥生時代では県内最大規模の集落遺跡として周知されており、これまでに59次を数える発掘調査が行われている。太田・黒田遺跡が立地するJR和歌山駅の東側一帯は、紀ノ川南岸平野部の標高4m前後を測る微高地である。

過去の調査では、弥生時代前期末の並走する2条の環濠や土坑、中期の竪穴建物及び井戸、同じく中期の水田や土器棺墓など弥生時代を中心とする遺構群のほか、古墳時代の竪穴建物や溝、井戸などの遺構群、奈良時代の溝や井戸、平安時代から江戸時代にかけての溝や土坑など多種におよぶ遺構群が検出されている。また遺物では、弥生時代のものとして絵画土器(高床建物・鹿)を含む多量の弥生土器、直柄広鍬及び一本平鋤などの木製農耕具、銅鐸や銅鏃などの金属器が出土している。さらに遺跡の南半は、日本三大水攻めのひとつとして室町時代に豊臣秀吉が水攻めを行った太田城跡の推定地にあたる。

今回の調査地は、奈良時代の大溝などが検出された第33・34次調査地の北東約60mに位置し、弥生時代前期の環濠のほか、古墳時代前期の竪穴建物や後期の溝、奈良時代の土坑などを検出した第51次調査地の南約60mに位置する。

調査内容

今回の調査は、開発計画範囲約1300㎡を対象に2×5m四方のグリット調査区を4カ所設定して 実施した。調査地における基本層序は、調査地全面に堆積する現表土である造成土を除去した下面 が現代の耕作土(第1層)であり、第2層は暗灰黄色系の細砂混シルト、第3層は黄褐系の細砂混



-4-

シルトである。また、第4層は鎌倉時代の遺物包含層と考えられる黄褐色系の粗砂混シルトであり、第5層は平安時代の遺物包含層とみられる黄灰色系の細砂混シルトである。次に、第6層から第10層は黄褐色系のシルトであり、このうち弥生時代中期の遺物包含層である第6層が黄橙色細砂混シルト、土器の小片を含む第7層がにぶい黄褐色シルトであり、無遺物層として第8層がにぶい黄褐色シルト、第9層が黄褐色シルト混粘土、第10層が炭を含む黄褐色系のシルト混粘土である。

遺構は、第5層上面、第6層上面、第7層上面に おいて検出した。このうち第7層上面は、第3区に おいて炭層の堆積を確認したことから遺構面と判断 した。また、第6層上面は弥生時代から奈良時代に かけての遺構面であり、第5層上面は鎌倉時代以降 の遺構面である。遺構検出面の標高は第7層上面が 2.55m前後、第6層上面が2.65~2.80m、第5層上面 が2.75m前後を測る(写真1~4)。

まず第6層上面では、第1区において奈良時代から平安時代のものとみられる溝及び鎌倉時代の溝のほか、ピットなどを検出した。また第2区では弥生時代後期の落ち込み(溝?)のほか、第3区では弥生時代のものとみられる溝や土坑及び古墳時代後期のものと考えられる溝などを検出し、さらに第4区では弥生時代中期前葉のものと考えられる土坑、また中期中葉の溝を検出した。

第5層上面では、第3区において鎌倉時代の井戸 を検出した。

まとめ

今回の調査結果から、調査対象地には弥生時代中期初頭から前葉にかけての遺構検出面とみられる第7層上面及び、弥生時代中期前葉から奈良時代及び鎌倉時代にかけての遺構検出面である第6層上面、また鎌倉時代以降の遺構検出面である第5層上面という合計3面の遺構面が存在すると考えられる。

(藤藪勝則)

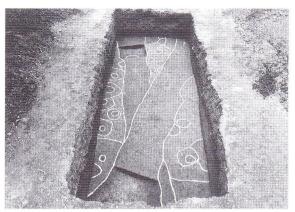


写真1 第1区全景(東から)

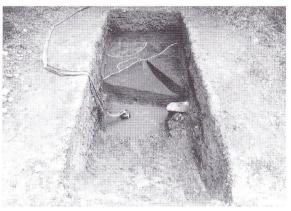


写真2 第2区全景(西から)

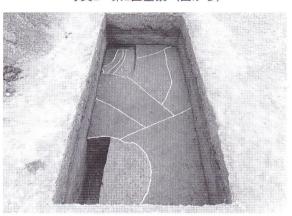


写真3 第3区全景(西から)

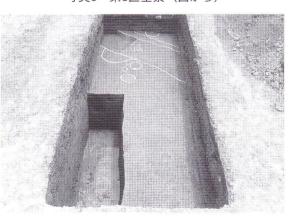


写真4 第4区全景(西から)

3. 太田・黒田遺跡 第61次調査

調 **査 地** 和歌山市黒田字池ノ首75番1・3地内 調**査面積** 644.4㎡

位置と環境

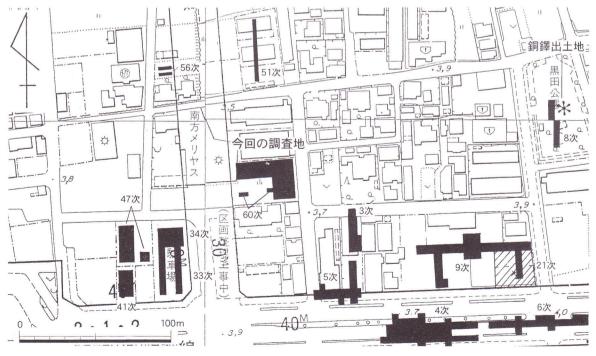
太田・黒田遺跡第60次調査参照。

調査内容

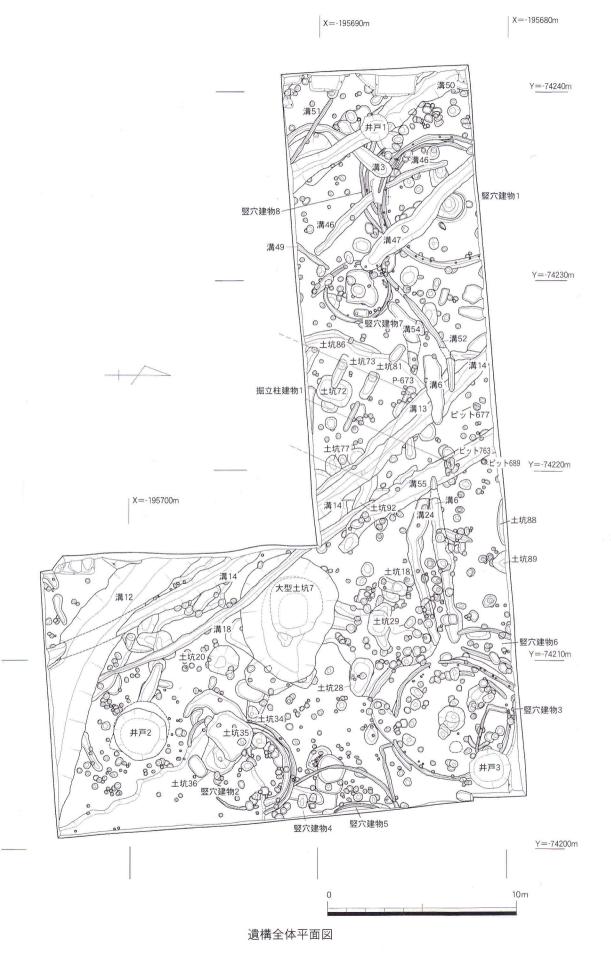
調査は、調査対象地において確認調査 (第60次調査) を行ったところ、弥生時代から鎌倉時代にかけての多数の遺構が検出されたため、第61次調査として開発計画範囲全面を対象として本発掘調査を実施することとなった。

今回の調査は、開発計画範囲約1300㎡を対象に調査面積1029.1㎡について本発掘調査を行う予定であったが、遺構密度及び人力掘削土量など、予定作業量が大幅に増加する状況となった。よって、和歌山県教育委員会の指導のもと、和歌山市教育委員会と協議の結果、第60次調査によって遺構密度が高いと考えられる調査地東側及び北側について調査を行うこととなった。

調査は、調査地内にL字状の調査区を設け、第1区(南北トレンチ)351.4㎡及び第2区(東西トレンチ)293.0㎡とし、合計面積644.4㎡について分割して行った。重機による掘削は、第60次調査成果を参考とし、鎌倉時代の遺構検出面である第5層上面まで慎重に行い、検出した遺物包含層及び遺構、並びにサブトレンチによる下層調査を人力掘削によって行った。調査地における基本層序及び遺構検出面の標高などは、本調査の事前調査である第60次調査成果によった。遺構は、第6層上面において弥生時代前期末の土器棺、中期中葉の井戸及び土坑、中期の掘立柱建物や竪穴建物のほか、溝、大型土坑、後期の溝や土坑、古墳時代前期の井戸や土坑、古墳時代後期の溝や土坑、飛鳥時代の井戸などを検出した。また第5層上面では、鎌倉時代のものと考えられる井戸や溝及びピッ



調査位置図



トを検出した。

[弥生時代の遺構]

調査区中央部北側において検出したピット677・689は前期の土器棺墓である(写真1)。

調査区東端部において検出した土坑36は、井戸であり覆土から中期中葉のものと考えられる完形の直口壺が1個体出土した(写真2)。

調査区中央部で検出した中期の掘立柱建物1は、 土坑73・81・86・92及びピット673・763で構成され る建物である。この建物の特徴としては、棟持柱と 考えられるピット763をもち、柱穴掘方(土坑73・ 81・86・92、ピット673)の平面形が隅丸長方形で あり、その底面は東から西に傾斜することである。 柱穴掘方の規模は長径1.5~1.8m、短径50~70cm、深 さは検出面から最大70~90cmを測る。独立棟持柱は 長径約60cm、短径約40cm、深さ約50cmの楕円形掘方 の中央に柱材が遺存していた。建物の規模は、梁間 1間、桁行3間以上のもので、桁行の柱間の間隔が 1.7~2.0m、建物妻部から棟持柱までの距離は約 3.5mを測る。よって床面積は30㎡以上となる。ま た建物の主軸はN-22°-Eを向く(写真3)。

調査区の北東部及び西端部では竪穴建物1~8を 検出した。そのうち竪穴建物1~3・7は、直径3.5 ~7.0mを測る平面円形の建物である。調査区西端 部で検出した竪穴建物1は直径約7.5mを測るもの で、炉堤をもつ住居であり壁溝の重複関係から2回 以上の拡張が行われている。調査区東端部において 検出した竪穴建物2は壁溝の重複関係から拡張が 行われた住居であり、竪穴建物3は床面に貼り床を 施し拡張を行った住居である(写真4・5)。

その他、調査区中央部で検出した土坑77からは絵画土器(鹿)が1点出土し、また調査区東側中央部において検出した大型土坑7は、長径7.0m、短径5.0m、深さ1.9mを測る不定形の土坑であり、遺構覆土から大量の弥生土器及び石器のほか、獣骨、魚骨及び貝殻、炭化米が出土した。

[古墳時代の遺構]

調査区中央部やや東側において検出した土坑34及

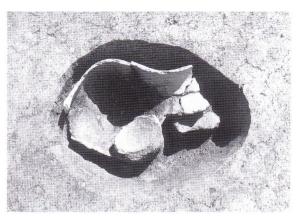


写真1 ピット677 (北西から)

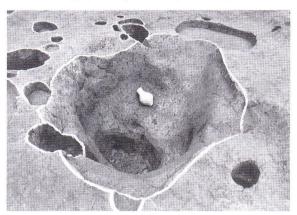


写真2 土坑36 (北西から)

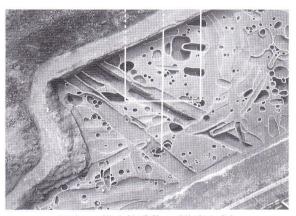


写真3 掘立柱建物1(北東から)



写真4 竪穴建物1(南から)

び中央部東側北壁際において検出した土坑89は古墳 時代前期の素掘りの井戸である。また調査区の北西 から南東方向に続く溝13・14は古墳時代中期から後 期の溝であり、遺構覆土内から馬歯が数点出土して いる。さらに同じ方向性の溝46・47・50・55は、古 墳時代後期の溝である(写真6)。

[飛鳥時代の遺構]

第1区南東隅部において検出した井戸2は、直径約2.8m、深さ約2.8mを測る平面円形の掘形内部に水溜めとして横板組井戸枠を埋設したものである。井戸枠は長さ90~108cm、厚さ4~7cmを測る転用板材を平面正方形の「井」の字状に組み上げたもので、内法は一辺60~70cmを測る。また井戸枠の深さは検出面から約1.7mである。井戸枠の構造は、板材を横方向に積み段違いに組み上げるものである。また板材の両端には、上下に相欠きと呼ばれる切り込みが施され、この切り込み部に直交する別の板材の切り込みを組み合わすことで各板材を固定している。井戸枠内からは、井戸廃棄時の祭祀に使用されたとみられる飛鳥時代の須恵器壺1個体や、古墳時代後期の耳環1点が出土した(写真7・8)。

遺物は、弥生時代前期から後期の大量の弥生土器 をはじめ、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・中世 土師器・輸入陶磁器・国産陶磁器・瓦・土製品・石 器・石製品・木製品・金属器などがある。

まとめ

今回の調査では、弥生時代中期の集落内部の様相を把握する上で重要な成果を得た。特に本遺跡では初めて掘立柱建物と竪穴建物が共存する状況がみられたほか、竪穴建物の分布状況等から集落の中心部が調査地の北及び東部に広がる可能性がある。さらに古墳時代では、初頭から前期にかけての井戸及び土坑を検出したほか、後期から中期のものとして北西から南東方向の溝群を検出した。最後に飛鳥時代では、横板組井戸枠をもつ井戸を検出し、古代の太田・黒田遺跡の一端を知る貴重な資料を得た。

(藤藪勝則)

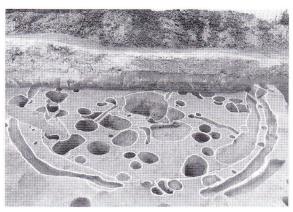


写真5 竪穴建物3 (南から)

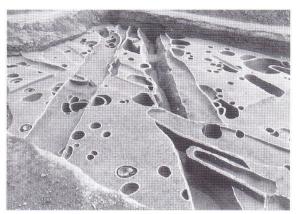


写真6 溝13・14・55 (北西から)

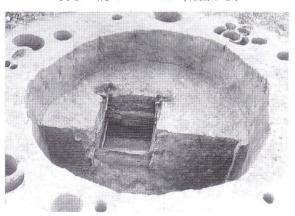


写真7 井戸2(北から)



写真8 井戸2 井戸枠内遺物出土状況(西から)

4. 鳥井遺跡 発掘調査

調 查 地 和歌山市府中20 - 1 **調查面積** 40㎡

位置と環境

鳥井遺跡(遺跡番号92)は、紀ノ川下流北岸の標高7.0m前後の河岸段丘に立地する。遺跡は南北約250m、東西約200mの範囲をもつもので、河岸段丘でも縁辺部にあたる地点に位置し、土師器や須恵器が表採された遺物散布地として周知されている。

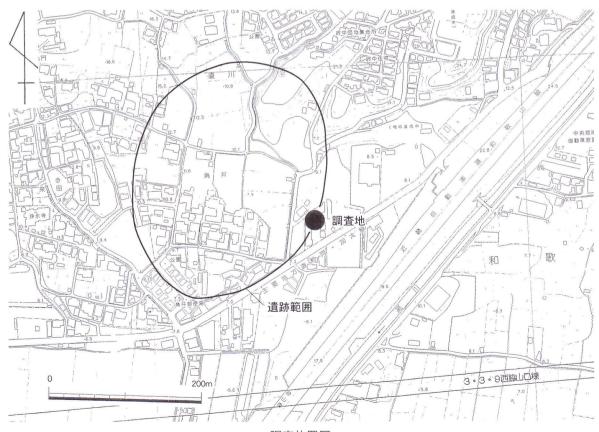
今回の調査契機は、まず遺跡の東側隣接地において造成工事が計画され、開発対象地の西端部が 遺跡の範囲に入っていたことから、工事に先立ち、和歌山市教育委員会による遺跡範囲確認のため の調査が行われた。確認調査の結果、遺構を検出したことから、本開発対象地は遺跡の範囲内であ ることが明らかとなった。

その後、本開発対象地において建物建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のための発掘調査を実施することになった。この調査は、財団法人和歌山市都市整備公社が同教育委員会の指導のもと委託を受けて確認調査として実施したものである。

現地調査は平成20年8月21日から同年9月11日までの期間で行った。

調査内容

調査地は、遺跡範囲東端部に位置し、現況は造成地であった。調査は、開発予定地内に、幅2.0m、 長さ4.0m、面積8.0mの調査区を5ヵ所設定し、北東から第1~5区とした。



調査位置図

各調査区の土層堆積状況であるが、第1・4区で造成土の厚さが約30cmを測る。その下層は、旧表土に相当する厚さ15~20cmの水田耕土(第1層)が堆積しており、第2層は厚さ約15~20cmの褐色のシルトであり、この層は床土に相当するとみられる。第3層は10~15cmの厚みをもつ灰色の礫、第4層は10~25cmの厚みの暗灰黄色の粗砂混シルト、第5層は約10~20cmの厚みをもつ暗灰黄色の粗砂混シルトが堆積する。第6層は約10cmの厚みをもつ黄褐色の粗砂混シルト、第7層は約5

cmの厚みをもつ灰オリーブ色の粗砂混シルトが 堆積する。第8層は約25~40cmの比較的厚みを もつにぶい黄褐色の粗砂混シルトが堆積する が、この層上面が鎌倉時代頃の遺構面(第1遺 構面)である。第9層は約10cmの厚みをもつ褐 色の粗砂混シルト、第10層は約20cm以上の厚み をもつ黄褐色のシルト、第11層は約10cm以上の 厚みをもつ灰色の礫が堆積する。第10層上面が 遺構面(第2遺構面)であり、第9層が平安時 代前期の遺物を包含する土層であることから、

第2遺構面は平安時代前期頃の時期のものであるとみられる。なお、第10層以下からは遺物が出土しなかったことから自然堆積層と考えられる。

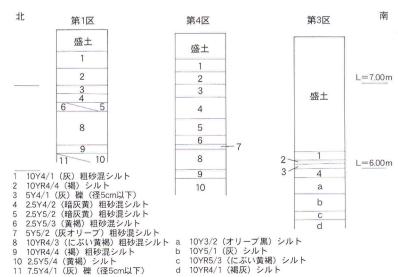
以上、第1・4区の土層堆積の特徴としては、 地表面から第4層上面までは水平に近い堆積状況 を示すが、第5層以下の堆積は南に傾斜すること から、旧地形を反映した堆積であるとみられる。

第2・3・5区では、造成土の厚さが約1.4mを 測る。その下層は、旧表土に相当する厚さ約10cm の水田耕土(第1層)が堆積しており、第2層は

厚さ約5cmの褐色のシルトであり、この層は床土に相当するとみられる。第3層は約5cmの厚みをもつ灰色の礫、第4層は約10cmの厚みの暗灰、黄色の粗砂混シルトが堆積する。第2層と第3層の上面から礫を充填した暗渠排水は農耕関係の遺構とみられ、第4層までは第1・4区の堆積と共通したものであると考えられる。それ以下の堆積につい



写真1 調査前の状況(南から)



調查地土層柱状模式図

ては、第1・4区と異なったものである。a層は厚さ約20cmのオリーブ黒色のシルト、b層は約20cmの灰色のシルト、c層は厚さ約10cmのにぶい黄褐色のシルトが堆積しており、遺構を検出しなかったが、これらの土層からは平安時代後期から鎌倉時代までの遺物が出土しており、水田耕土の可能性がある。d層は約10cm以上の厚みをもつ褐灰色のシルトが堆積するが、遺物が出土しなかったことから自然堆積層と考えられる。

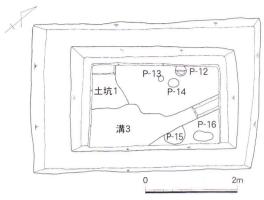
第1・4区の遺構面と第2・3・5区の土層堆積の対応であるが、第1遺構面にはa層上面、第2遺構面はd層上面がそれぞれ対応するものと考えられる。

なお、調査地の地表面標高は約7.5mを測るが、第1・4区と第2・3・5区の造成土の厚さが大きく異なることから、調査地の旧地形が二単位の比高差をもっていたと考えられ、土層堆積状況もそのことを反映している。調査地北側にあたる第1・4区では旧地表(水田)面は標高約7.4m、南側の第2・3・5区では標高約6.2mを測り、その比高差は1.2mに及ぶものである。

今回の調査では、第1・4区の二つの調査区において、第10層上面で平安時代前期頃とみられる遺構を検出した(第2遺構面)。また、第1区の土層観察で第8層上面にも遺構面(第1遺構面)が存在することを確認した。この第1遺構面所属の遺構は第1区で検出した遺構のうち溝3であり、遺構の底部が第2遺構面に達した状況で同一面において検出したものである。

第1区の遺構は、第10層上面において、土坑1基(土坑1)、ピット5基(P-12~16)を検出し、第8層上面からの遺構として、溝1条(溝3)を検出した。これらの遺構からは土師器細片が出土し、第9層から黒色土器A類が出土したことから、第10層上面の遺構の時期は平安時代前期頃と考えられる。

第4区の遺構は、第10層上面において、小ピット11基 (P-1~11)、溝2条(溝1・2)を検出



第1区遺構平面図

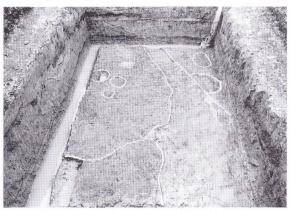
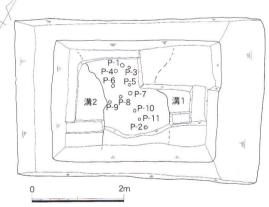


写真2 第1区全景(西から)



第4区遺構平面図

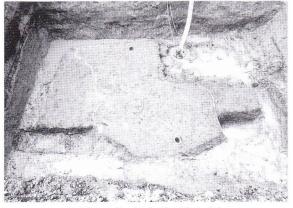
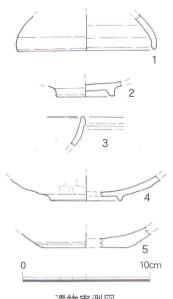


写真3 第4区全景(南から)

した。小ピット群は全て杭跡とみられ、溝は2条共南北方向のもの である。これらの遺構から遺物は出土しなかったが、第9層から土 師器細片が出土している。

第2・3・5区においては、遺構を検出しなかったが、第1・4 区の第1遺構面にはa層上面、第2遺構面はd層上面がそれぞれ対応 するものと考えられ、a~c層からは平安時代後期から鎌倉時代まで の遺物が出土しており、土質や堆積状況から水田耕土の可能性があ る。

遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、中世土師器、輸入陶 磁器、肥前系陶磁器などコンテナ1/2箱が出土した。遺物は細片 ばかりであるが、実測図の作成及び器種の判定が可能なものは、須 恵器杯蓋(1)、黒色土器椀(2)、中国製白磁椀(3)、瓦器椀 (4)、中世土師器皿(5)がある。



遺物実測図

須恵器杯蓋(1)は、口径11.0cm、残存器高2.8cmを測る、淡灰褐色のものである。黒色土器椀 (2)は、高台径4.6cm、残存器高1.2cmを測るもので、内面を黒色としたいわゆるA類椀である。中 国製白磁椀(3)は口縁端部に小さい玉縁が付くもので、太宰府編年の白磁碗Ⅱ類に相当するもの である。色調は灰白色で、残存器高2.4cmを測る。瓦器椀(4)は灰褐色の色調のもので、高台径5.6 cm、残存器高2.0cmを測る。高台の形状などから12世紀代のものと考えられる。中世土師器皿(5)は 淡褐色の色調のもので、底径6.8cm、残存器高1.7cmを測る。底部に回転糸切痕を残すもので、中世前 期のものと考えられる。

これらの遺物の出土位置は、1が第4区の壁面調整時採集、2は第2区第6層、3は第1区第3 層、4は第2区第5層、5は第5区第6層である。

まとめ

今回の調査において、調査地北半部で鎌倉時代頃の遺構面(第1遺構面)及び平安時代前期頃と みられる遺構面(第2遺構面)を検出した。これらの遺構には土坑、ピット、溝などがあり、遺物 を出土することなどから集落の範囲内であったものと考えられる。

また、これら2面の遺構面に対応する調査地南半部の土層では水田耕土とみられる堆積を確認し ており、北半部の集落に対応する農耕地が南半部に展開していたものと考えられる。調査地内での 境界は、第1・4区の南側と第2・3・5区の北側の間にあるといえる。

北半部にみられる2面の遺構面は緩斜面上に形成されたものと考えられ、第6層までは旧地形の 堆積状況を示すが、第5層は整地土とみられる土層であり、明確な時期は不明であるが鎌倉時代か ら江戸時代にかけての間に調査地北半部は盛土され、現在みられるような農耕地に開発されたもの と考えられる。 (北野隆亮)

5. 川辺遺跡 第10·11次調査

調 查 地 和歌山市川辺字千地237番地 他 調查面積 1596.8㎡

位置と環境

詳細は、川辺遺跡第9次確認調査を参照。この第10・11次調査は、第9次確認調査成果と財団法人和歌山県文化財センター(以下、県センターと呼ぶ。)が行った一般国道24号バイパス線の調査成果をもとに東側の水田及び畑地における大規模開発計画を起因とする事前の本発掘調査として行ったものである。

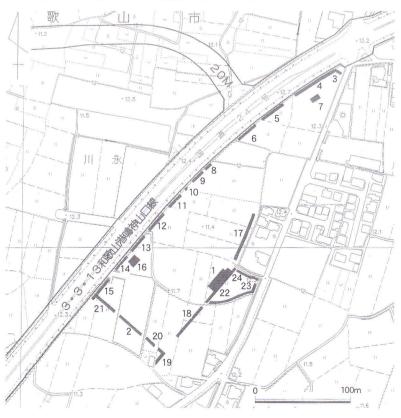
調査内容

今回の調査は、開発計画範囲約20,000㎡の内、ほぼ周囲を囲う擁壁工事路線を対象に幅2.5m前後の調査区を18区画に分け設定した他、浄化槽設置に伴う調査区(第1・7区)と防火水槽設置に伴う調査区(第16区)があり、第10次及び第11次調査を踏襲して第21区までの調査を行った。また和歌山市教育委員会の直接調査として東側区画の擁壁部分の調査があり、第22~24区として調査位置図に示した。

調査地の基本層序については、第9次確認調査で示した状況と同様であり、特筆すべきは第1区で行った弥生時代中期の遺構を検出したベース層(第6層)の堆積土内から一定量出土した縄文時代後期の堀之内II式に併行する遺物群がある。

今回の調査では大半の調査区において様々な時期の良好な遺構を検出した。

まず、最北端にあたる第3区か ら国道沿いに南下する第6区にか けては、第6層上面の標高が 10.95mから9.90mへ下降する傾向 にある。微高地部にあたる第3区 で検出した遺構は、江戸時代の溝 3と弥生時代末期から古墳時代初 頭頃に位置づけられる溝7及び土 坑28がある(写真1)。また南側に 向かう緩斜面に沿って南北方向の 溝が3条(溝4・5・9)掘削さ れている。この他、第4区で検出 した土坑26や微低地に相当する第 5・6区にまたがる一連の遺構と 考えられる土坑19・21及び第6区 で検出した土坑20はともに大規模 なものである。時期的には奈良時 代頃を中心とするものとみられ



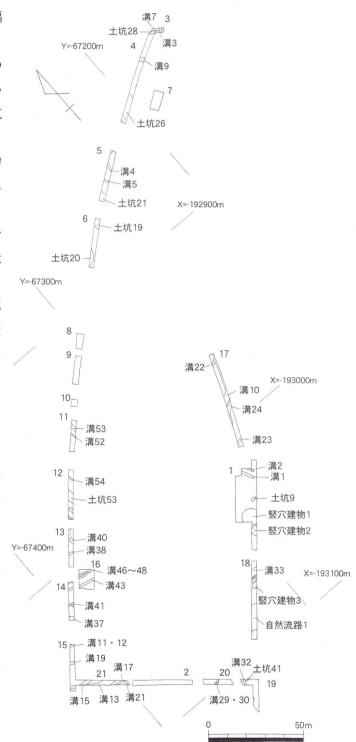
調査位置図(数字番号は調査地区番号を示す。)

る。

対象地南東部にあたる第1・17・18区では、北端部にあたる第17区で検出した溝24から南側と第1区南端部までの範囲は標高約10.95mの高さで安定した微高地を形成し、溝24を境とする北側と第18区北端から南側は緩やかに下降する微低地となる。第17区ではこの傾斜変換点に沿って弥生時代後期と考えられる溝24と江戸時代の溝10が掘削されている。溝24は上端幅2.8m、下端幅0.6m、深さ1.1mの大規模な逆台形の断面形をもつもので、再掘削が認められ、北側にずれる形で古段階の溝を

検出した。この古段階の溝は復元幅 2.1m、深さ0.9mで断面形が「V」字状と なる。安定した微高地部にあたる範囲の 遺構は、第1区及び第17区南半部におい て弥生時代中期の竪穴建物1・2、土坑 墓1基(土坑9)、溝状遺構3条(溝1・ 2・23) を検出した (写真 2)。 竪穴建物 1・2はともに第1次調査時に確認され ていたもので詳細については割愛する (写真3)。また溝1・2は幅80cm程度で 検出面からの深さが50~85cmを測る溝状 遺構で、幅約3mの間隔をもって平行に 掘削されている(写真4)。ともに南端部 は急激に立ち上がり途切れるもので、覆 土内に焼土や炭が混ざるなど類似点が多 い。また北側に位置する溝23も覆土等に 共通点がみられることから一連の遺構と も考えられ、方形周溝墓を構成する溝の 可能性が考えられる (写真5)。

北側微低部に位置する第18区では、弥生時代中期の竪穴建物 3 (写真 6) や奈良時代の東西方向に軸をもつ溝33の他、自然流路 1 を検出した。竪穴建物 3 は直 Y=-67400m径5.5mの円形住居で、床面中央には直径55cm前後の炉が配され、検出範囲において3ヶ所の主柱穴を確認したことから4本柱の竪穴建物であったものとみられる。自然流路 1 は最も微低地である第18区北半部(標高9.50m)から南側に落ち込むもので、幅約13m、深さ70cm以上を測り、底面までの確認はできていない。出土遺物から最終埋没は6世紀頃と考え主要



主要遺構配置図(数字番号は調査地区番号を示す。)

られる。

対象地南半部西端の第8~16区では、第11区か ら第12区にかけて第6層上面の標高が10.40m前 後と比較的安定した状況にあり、第11区以北の第 8~10区にかけて緩やかに下降し、第8区では標 高9.95mとなる。また第14区以南についても下降 する状況である。検出した遺構は、奈良時代を中 心とする溝群を多数検出した。溝は第13区を境と して北側は南北方向に掘削されたもの(溝40・52 ~54) があるのに対し、南側は第21区にかけて東 西方向に掘削されたもの (溝11~13・15・17・19・ 37・38・41・46~48) が大半を占める特徴がある (写真7)。また最南端である第19・20区も第6層 上面の標高が9.90~10.00mと比較的低いものの安 定した状況であり、第19区北端部にのみ第18区に 向かって下降する状況を確認した。溝以外の遺構 では、奈良時代から平安時代の掘立柱建物を構成 するとみられるピット群を第14・16・19・20区で 検出した(写真8)。この内、間尺等を確認できた ものは第16区の一列のみであり、間尺1.8m前後で 3間以上に延びるものと考えられる。

出土した遺物の種類には、縄文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、中世土師器、 肥前陶磁器、土製品、石器などがある。出土遺物 の中で目立ったものとしては、第1区を中心とし て出土した縄文時代後期の土器群があり、共伴す る石鏃や石錘なども出土している。弥生土器も第 1区周辺の竪穴建物や溝状遺構を中心に一定量 の出土をみた。また弥生時代以降の遺物群はほ ぼ全調査区に分布する傾向にあり、特に7世紀か ら8世紀代の遺物は多数検出した溝内部に良好な ものがある。

まとめ

今回の調査において確認した遺構は県センターが実施した県道及びバイパス線の調査において検出した遺構及びその西側で当財団が調査を行った第4~6次調査に繋がるもので、遺跡の様相等類



写真1 第3区全景(東から)



写真2 第1区全景(南西から)



写真3 第1区竪穴建物1(北から)



写真4 第1区溝1・2 (南から)

似する点が多くあるものの縄文時代後期の遺物群 の出土など新たな様相も明らかにした。

まず縄文時代の様相は、遺跡西部の調査であった第6次調査で検出した土器棺など晩期を中心とする遺構群であったものが、今回の第1区で出土した土器群は後期に位置づけられるもので、明らかに時期差が認められ新たな様相の一端であるものといえる。また弥生時代中期の範疇では竪穴建物など居住域を示す遺構群が検出され、その集落域が第1区周辺から東側に展開しているものと考えられる。この集落は、竪穴建物と土坑墓などの墓域を近隣にもつ形態のものである。また弥生時代末期から古墳時代初頭にかけては、対象地北端の第3区でのみ確認した溝及び土坑があり、県センター調査区や第4次調査地に広がる様相がみられることから今回の第3区周辺がこの時期の集落域としての南限として位置づけられよう。

次に画期が認められるのは飛鳥時代から奈良時代にかけてであり、多数の溝を中心とした遺構群を検出した。溝は第13区を境として方向性を変える傾向が顕著にみられる。このことは、今回の調査によってさらに明確となった微高地と微低地の等高ラインに沿った掘削方法を示しているものと考えられる。また特に出土遺物量の多かった第18・21区周辺には居住域を示す建物等の遺構が展開するものとみられる。このことは、若干時期差はあるものの近辺である第14・16・19・20区で検出したピット群と符合する出土傾向といえよう。

(井馬好英)

【参考文献】

「川辺遺跡発掘調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報 -平成13年度-』和歌山市教育委員会 2003年 『川辺遺跡第4・5・6次発掘調査報告書』財団法人 和歌山市都市整備公社 2008年



写真5 第17区溝23周辺(南から)

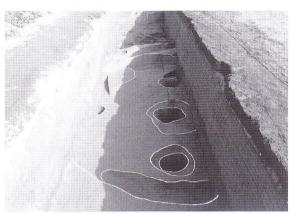


写真6 第18区竪穴建物3 (南西から)

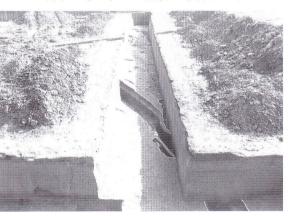


写真7 第21区溝15周辺(西から)



写真8 第16区全景(南東から)

6. 神前遺跡 第5次調查

調 查 地 和歌山市神前馬乗免563番地 1 **調查面積** 50㎡

位置と環境

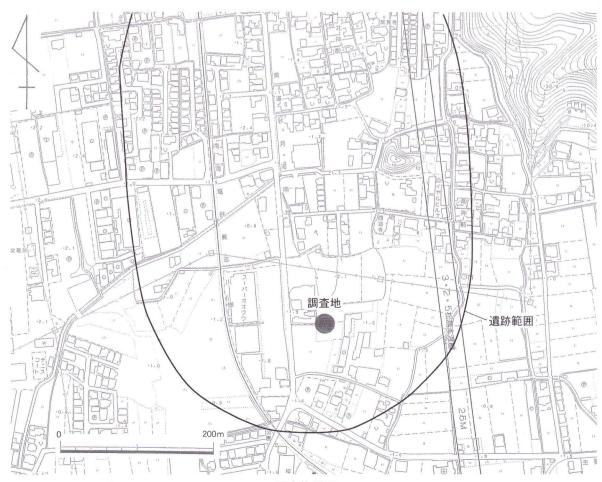
神前遺跡(遺跡番号307)は、和歌山市域のほぼ中央部、紀ノ川下流南岸の標高1.5m前後の沖積地に立地する。遺跡は、北側を井辺遺跡と接しており、南北約700m、東西約450mの広い範囲をもつもので、これまでに4次数の調査が実施されている。

今回の調査地は、遺跡中央部からやや南寄りに位置するもので、宅地開発が計画されたことから、 工事に先立ち、遺跡の内容確認のために発掘調査を実施することになった。この調査は、財団法人 和歌山市都市整備公社が同教育委員会の指導のもと委託を受けて確認調査として実施したものであ る。

現地調査は平成20年9月10日から同年10月9日までの期間で行った。

調査内容

調査地は、遺跡中央部からやや南寄りに位置し、現況は造成地であった。調査区は、開発予定地内に、幅2.0m、長さ5.0m、面積10.0mの調査区を5ヵ所設定し、北東から第1~5区とした。調査



調査位置図

地の現地表面標高は約2.0mを測る。

各調査区の土層堆積状況であるが、まず、造成土の厚さが60~70cmを測る。その下層は、旧表十 に相当する厚さ10~20cmの水田耕土(第1層)が堆積しており、第2層は厚さ5~10cmの褐色の粗 砂混シルトであり、この層は床土に相当するとみられる。第3層は20~25㎝の厚みをもつ暗灰黄色 のシルト、第4層は15~20cmの厚みの褐灰色のシルトが堆積する。第4層上面が弥生時代中期~鎌 倉時代までの遺構面である。第5層は20cm以上の厚みをもつオリーブ褐色のシルトが堆積するが、

遺物が出土しないことから無遺物層とみられる。 遺構については一部を掘削し、規模の確認や出土 遺物の採取を行った。

今回の調査では、第1~3・5区の第4層上面 において弥生時代中期~鎌倉時代までの遺構面を 検出したが、第4区では遺構を検出しなかった。 遺構面(第4層上面)の標高について各調査区を 比較した場合、東側に位置する第1・3区は 1.10m、調査地中央部の第2区は1.05m、南西に位 置する第5区は1.00mであり、これらはほぼ平坦 地であるとみられる。また、遺構を検出しなかっ た第4区は標高0.85mと最も低い値を示し、各堆 積層に共通して傾斜がみられることから、調査地 北西方向に微低地が展開するものと考えられる。

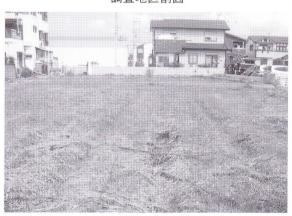
第1区の遺構は、ピット1基(ピット10)、溝1 条 (溝3) を検出した。ピット10は南北約20cm、 東西約40cmの楕円形のもので、深さは約5cmを測 る。須恵器蓋(6世紀初頭)が1点出土した。溝 3 は幅約1m以上、深さ約20cm以上、長さ約2m 以上を測るもので、北東から南西方向に走向方向 をもつ。弥生時代中期の土器

两

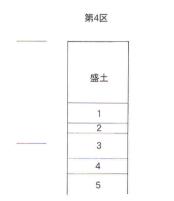
第2区の遺構は、調査区の 西側2/3を占める範囲で、 溝1条(溝3)を検出した。溝 3は幅約3m以上、深さ40㎝ 以上を測る大溝で、北東から 南西方向に走向方向をもつも のである。遺構からは弥生時 代中期の土器が一定量出土し た。この大溝は第1区で検出 した溝3の延長部にあたるも

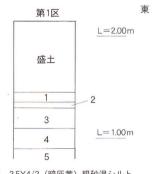
が出土した。





調査前の状況 (南から) 写真1





- 2.5Y4/2 (暗灰黄) 粗砂混シルト
- 10YR4/6 (褐) 粗砂混シルト
- 2.5Y5/2(暗灰黄)シルト 10YR5/1(褐灰)シルト
- 2.5Y4/4 (オリーブ褐) シルト

調査地土層柱状模式図

のとみられ、長さ13.5m以上を復元することができ、更に南西方向に延長した場合は第5区の北側付近を通過するものと考えられる。

第3区の遺構は、ピット4基(ピット1~4)、 溝1条(溝1)を検出した。ピット1・4は直径 約30cm、深さ約5cmを測る小規模なもので、ピット2・3は直径5cm程度の杭跡とみられる。溝1 は調査区南東隅で検出したもので、幅40cm以上、 深さ20cm以上を測るもので、北東から南西方向に 走向方向をもつものである。

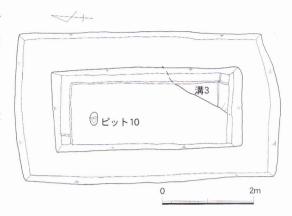
第5区の遺構は、ピット5基(ピット5~9)、 溝1条(溝2)を検出した。ピット5は直径約45 cm、深さ約15cm、ピット6は直径約20cm、深さ約 20cm、ピット7は直径約12cm、深さ約7cm、ピット8・9は直径約30cm、深さ20cm以上の規模をそれぞれ測る。また、溝2は幅約30cm、深さ約5cm、長さ1.3m以上の規模を測る溝である。

以上、遺構の掘削がごく一部のため、遺物が出土したものは第1区のピット10 (須恵器蓋) と溝 3 (弥生土器) に限られ、他は遺構出土遺物から 所属時期を判断することはできなかった。しかし、遺構面直上の第3層から瓦器・中世土師器・中世須恵器など鎌倉時代の遺物が出土していることや遺構埋土にバリエーションがあることなどから、これらの遺構の所属時期は弥生時代中期から鎌倉時代までの時期幅を考えることができる。

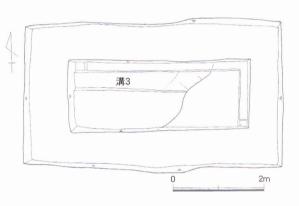
遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、 瓦器、中世須恵器、中世土師器、土師質・瓦質土 器、中世陶器、輸入陶磁器、肥前系陶磁器、瓦、 石器などコンテナ1箱が出土した。

出土遺物は細片が多いが、器種の判定が可能な ものは、弥生土器壺・甕、須恵器杯蓋、黒色土器 椀、瓦器椀、東播系須恵器捏鉢、中世土師器皿・ 釜・堝、瓦質土器壺、備前焼大甕・擂鉢、常滑焼 甕、中国製青磁碗、肥前系染付丸碗、砂岩製磨石 などがある。

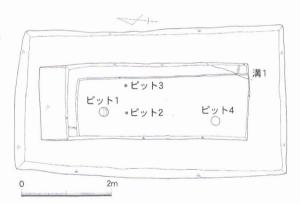
これらの遺物のうち、弥生土器甕(1)·壺(2)、 須恵器杯蓋(3)、瓦器椀(4)、中世土師器皿



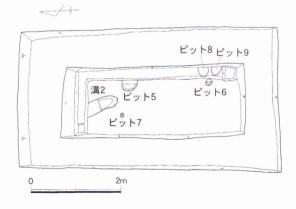
第1区遺構平面図



第2区遺構平面図



第3区遺構平面図

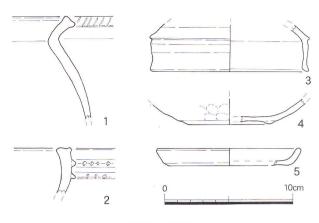


第5区遺構平面図

(5) について、実測図を作成することが できた。

弥生土器甕(1)は口縁部を外反させ、 端部を面取りし端面に刻み目を施すもので ある。残存器高8.1cmを測る、灰褐色のもの である。弥生土器壺(2)は口縁部外面に 2条の突帯を貼りつけた直口壺である。突 帯には刻み目を施している。淡茶褐色のも ので、残存器高3.6cmを測る。須恵器杯蓋

(3) は淡灰色の色調のもので、口径12.4



遺物実測図

cm、残存器高3.7cmを測る。瓦器椀(4)は黒褐色の色調のもので、高台径6.4cm、残存器高2.0cmを測る。高台の形状などから13世紀代のものと考えられる。中世土師器皿(5)は赤褐色の色調のもので、口径11.4cm、器高1.4cmを測る。底部に回転糸切痕を残すもので、中世前期のものと考えられる。これらの遺物の出土位置は、1が第2区溝3、2・5は第1区第3層、3は第1区ピット10、4は第3区第3層である。

まとめ

今回の調査において、調査地の北西部(第4区)を除く大部分の地点(第 $1\sim3\cdot5$ 区)で、弥生時代中期~鎌倉時代までの遺構面を検出した。これらの遺構にはピット、溝があり、広範囲に遺物を出土することなどから集落などの微高地の範囲内であったものと考えられる。

また、遺構面の標高について各調査区を比較した結果、遺構を検出しなかった北西部(第 4 区)は $20\sim30$ cm程度低くなっており、全ての調査区において各堆積層(第 $1\sim5$ 層)に共通して北西に向かって低くなってゆく勾配が認められることなどから、調査地の北西方向に微低地が展開する旧地形を復元することができる。 (北野隆亮)

【参考文献】

『和歌山市内遺跡発掘調査概報 -平成10年度-』和歌山市教育委員会 2000年

『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報 6 - 平成 8 (1996)・9 (1997) 年度 - 』財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2000年

『和歌山市埋藏文化財発掘調査年報 7 -平成10年度(1998年度)・11年度(1999年度)-』財団法人和歌山市 文化体育振興事業団 2002年

『和歌山市内遺跡発掘調査概報 -平成20年度-』和歌山市教育委員会 2010年

7. 史跡和歌山城 第31次調查

調 査 地 和歌山市一番丁 3 番地 **調査面積** 526㎡

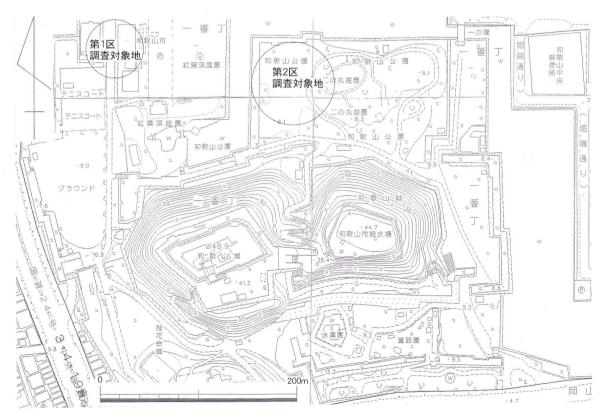
位置と環境

和歌山城は紀ノ川下流域南岸の平野部に位置する独立丘陵、岡山に築かれた平山城である。天正 13 (1585) 年に紀州を領有した豊臣秀吉によって築城が開始された和歌山城は、桑山重治を城代として本丸周辺を中心として築城が進められたとされ、慶長 5 (1600) 年に関ヶ原の戦いで軍功のあった浅野幸長が入城し、天守などの築造が行われた。その後、元和 5 (1619) 年に浅野氏に代わって徳川頼宣が入城し、二の丸の拡張や砂の丸などを増築した。そして、明治 4 (1871) 年の廃藩置県による廃城になるまで御三家のひとつ紀州徳川家が領有した。現在では国の史跡に指定されている。

和歌山城に関する発掘調査はこれまで30次を数え、数多くの遺構・遺物を検出している。中でも、平成13~18年度にかけて実施された「史跡和歌山城御橋廊下復元及び二之丸西部・西之丸第一期整備」(第25~29次調査)では御橋廊下の復元に繋がる重要な成果を得た。また、平成19度に実施した吹上口の調査(第30次)では絵図にみえる吹上橋の石垣張り出し部などを確認した。

今回の調査は、吹上口発掘調査(第30次)の追加調査、また二之丸整備のための事前発掘調査と して計画されたものである。発掘調査は和歌山市教育委員会文化振興課の指導のもと、財団法人和 歌山市都市整備公社が和歌山城管理事務所から委託を受けて実施した。

現地における調査は、平成20年11月27日から平成21年3月27日の期間で行ったものである。



調査位置図

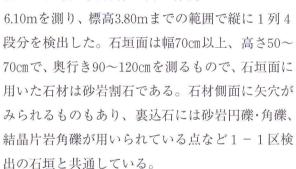
調査内容

調査は、吹上口と二之丸西部の2地点に分かれており、前者を第1区、後者を第2区と呼称した。 第1区は3ヵ所、第2区は2ヵ所の調査区を設けたことからそれぞれの調査区に枝番を付して、第 1区は1-1区~1-3区、第2区は2-1区と2-2区と細分を行い調査地区名とした。

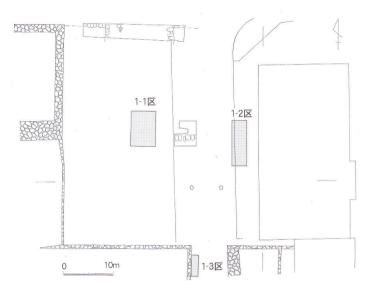
各調査区において遺構を多数検出した。以下、調査区毎に遺構の概略を説明する。

1-1区と1-2区では、西堀の南面石垣の一部を検出した。1-1区の石垣は、東西幅3.2mの

範囲で2段分を検出した。石垣面は幅60~70cm、高さ40~50cmの石材を横方向に並べて積んだ、いわゆる「打ち込みハギ布積み」と呼ばれる石垣の積み方である。石材の奥行きは70~80cmを測り、石垣面に用いた石材は砂岩割石に限られ、石材側面に矢穴がみられるものもある。間詰石の主体は砂岩角礫だが、わずかに結晶片岩角礫も混じる。裏込石には砂岩円礫・角礫、結晶片岩角礫がほぼ等量用いられていた。1-2区の石垣は、最上段石材上面の標高は



1-3区では、平成7年度に行った第14次調査で確認されていた江戸時代の遺構面を検出した。遺構は、御勘定御門に関する仕切石がある。仕切石は御勘定御門西側石垣面に接して設置されており、石垣面に直交する東西方向に2石分を検出した。石材には砂岩が用いられており、上面と北面は平滑に加工されたものである。仕切石を挟み南と北で江戸時代の道路面を検出したが、南側は標高6.75m、北側は6.65mの比高差約10cmを測り、仕切石は道路の傾斜を緩和する機能を持ったものとみられた。また、御勘定御門西側石垣構築時の整地層などを検出しており、この石垣は標高6.40m



第1区調査位置図



写真1 1-1区全景(北から)



写真2 1-1区サブトレンチ(北から)

から積み上げられたものと考えられ、詳細な時期 は不明ながら仕切石や道路面と同時期に築造され たものと考えられる。

2-1区では、平成14年度に行った第27次調査 の第4区で確認された江戸時代末期までの遺構面 を検出した。遺構は、土坑3基、漆喰貯水槽1基、 建物の礎石下部構造である根石6基(根石1~ 6)、土塀基礎石組・石組溝・石組集水枡がセット となる遺構がある。漆喰貯水槽は、漆喰を円形の 桶状にした溜枡で、直径1.34m、深さ80cm以上の 規模を測るものである。漆喰壁の厚さは12cmで、 特に内面約3cmは丁寧に仕上げ塗りを施したとみ られ、現在においても水は浸透しない。根石は6 基のうちの4基(根石1~4)は第27次調査第4 区で一部が検出されていたものであるが、今回の 調査で遺構の全体を確認した。また、新たに2基 (根石5・6)を検出し、合計で6基の検出となっ た。根石の平面形は不整形な楕円状であり掘方を 掘削した後、結晶片岩の礫と黄色シルトの土を充 填したものである。根石の規模は直径0.75~2.2m の範囲であり、根石群が構成する建物は北側の土 塀基礎石組と方向性が一致し、建物の東西柱芯々 間は約2.0mの規模を推定することができ、和歌山 城下町で徳川期に用いられた用尺(一間=六尺五 寸(1.97m))が使用された建物であるといえる。 土塀基礎石組と石組溝、石組集水枡はセットとし て機能しており、これらの遺構は大奥と外周通路 を隔てる役割を果たしていたものと考えられ、二 之丸拡張時に一連のものとして築造されたもの とみられる。石組溝は幅90cmの規模で、石組天端 からの深さは大奥側が約70cm、外周通路側は約85 cmを測る。底面に結晶片岩の長方形板石を敷き詰 め、側面は砂岩割石を3段積み上げるものであ る。北東隅から東に直線的に14.4m、また南にも 直線的に10.4mの範囲を検出した。用いられた砂 岩石材には2ヵ所に石垣刻印(側面1、上面1) がみられた。なお、石組溝南北方向の東面石組に は排水口が3ヵ所みられ、大奥側から土塀の地下



写真3 1-2区全景(南から)



写真4 1-2区堀石垣(北東から)



写真5 1-3区全景(南から)



写真6 1-3区仕切石(北から)

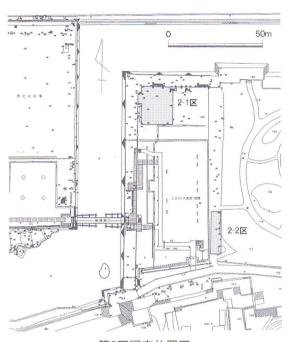
を暗渠でくぐり排水したものである。石組集水枡は石組溝の北西隅に付設されており、平面形は方形であり、南北1.40m、東西1.20m、深さ約2.00mの規模を測る。集水枡の底面は結晶片岩の不整形な板石を敷き詰めており、側面下部は砂岩割石の表面を平坦にした石組としているが、側面上部は結晶片岩の割石を積んでいる。底部西面には砂岩製の樋門を造り付けている。樋は加工石材を上下に

組み合わせたもので、樋門部分の内端面中央部上下に鉄製の楔を留めている。なお、集水枡の石組上面西側 1/3 は結晶片岩の板石で蓋をしていた。蓋石は東西幅0.90m、南北長1.95m、厚さ10cmの規模を測る巨大な板状石材である。土塀基礎石組は幅85cm、高さ約35cmの規模で、東西方向に9.70mの範囲を検出した。石組の天端標高は7.40mを測る。石材は砂岩割石を用いて組み合わせており、外面をノミで削り平坦面に加工している。

2-2区は、調査区東半部で平成16年度に行った第29次調査の第6区で確認された江戸時代末期までの遺構面(第1遺構面)を検出し、土坑3基(土坑2~4)、ピット2基を検出した。また、撹乱を受け第1遺構面を削平された調査区西半部において、江戸時代中期以前とみられる遺構面(第2遺構面)を検出し、土坑3基(土坑5~7)、砂岩礎石1基を検出した。特に砂岩礎石は絵図に描かれた建物に関するものとみられる。

遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、中世土師器、中世陶器、輸入陶磁器、近世土師器、近世土師質・瓦質土器、近世陶磁器(瀬戸美濃系、肥前系、京・信楽系、堺焼、大谷焼など)、近代・現代陶磁器、瓦、石製品、金属製品、自然遺物などコンテナ208箱が出土した。

近世土師器には、釜、焙烙、皿がある。特に皿はロクロ成形のものである。近世土師質・瓦質土器は、瓦質火鉢・蓋、土師質火鉢・植木鉢などがある。近世陶磁器については、瀬戸美濃系では褐釉天目茶碗、灰釉植木鉢・壺など、肥前系では刷毛目唐津鉢・大皿、染付丸碗・小杯・皿など、京・信楽系では灯明皿など、堺焼は擂鉢、大谷焼は褐釉大甕・徳利など、丹波焼は褐釉壺・徳利などが出土している。瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、滴水瓦、



第2区調査位置図



写真7 2-1区全景(北西から)



写真8 2-1区漆喰貯水槽(北から)

丸瓦、平瓦、桟瓦などの他、道具瓦として、塼瓦、 鬼瓦、鯱瓦、塀瓦、輪違瓦、棟込瓦などがあり、 出土量の主体を占める。石製品は砂岩砥石など、 金属製品は鉄製の鎹・角釘・鏨・刀子、銅製の角 釘・金具・キセル、銅銭(半銭・一銭)などがあ る。自然遺物は、貝類や魚骨、炭化物などがあり、 その他の遺物として、漆喰、壁土などが出土して いる。

まとめ

吹上口の調査において1-1区と1-2区で西堀の南面石垣の一部を検出した。なお、西堀の南面石垣周辺の吹上橋関連の遺構、及び南面石垣堀側に付設された階段遺構は建物建設時に壊され、既に失われたものと考えられる。御勘定門西側に設定した1-3区では、江戸時代の遺構面及び御勘定御門に関する仕切石を検出した。仕切石は御勘定御門西側石垣面に接して設置されていること、仕切石を挟み南と北は江戸時代の道路面であること、御勘定御門西側石垣構築時の整地層などを確認し、詳細な時期は不明ながらこれらの遺構は同時期に築造されたものと考えられた。

二の丸の調査では、2-1区において江戸時代 末期までの遺構面を検出し、土坑3基、漆喰貯水 槽1基、建物の礎石下部構造である根石6基、土 塀基礎石組・石組溝・石組集水枡がセットとなる 遺構を確認した。特に、大奥の範囲内で検出した 根石群であるが、和歌山城下町で徳川期に用いら れた用尺(一間=六尺五寸(1.97m))が使用され た建物であり、文政八(1825)年に描かれた『和 歌山二ノ丸大奥當時御有姿之図』にみえる「西御 小座敷」に相当するものと考えられる。

2-2区は、調査区東半部で江戸時代末期まで の遺構面(第1遺構面)を検出し、土坑3基、ピット2基を確認した。また、調査区西半部において、江戸時代中期以前とみられる遺構面(第2遺 構面)を検出し、土坑3基、砂岩礎石1基を確認 した。特に、今回検出した砂岩礎石1基は第29次

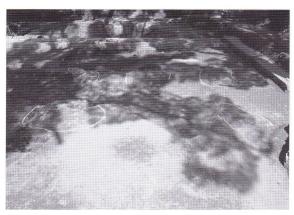


写真9 2-1区根石群(南から)

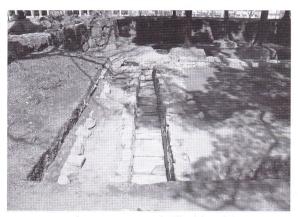


写真10 2-1区石組溝(南から)



写真11 2-1区石組集水塀(東から)



写真12 2-2区全景(南から)

調査第6区で検出していた礎石の南延長ライン上 に当たり、絵図に描かれた廊下部分の柱礎石に相 当するものと考えられる。なお、今回の調査にお いて浅野期埋没石垣の延長部分は第1遺構面にほ ぼ覆われており確認することができず、調査区南 北端に設定したサブトレンチ調査の結果でも検出 できなかった。

以上、今回の調査で、今後の吹上口及び二之丸 復元整備のための基本的な情報を得ることがで きたといえる。 (北野隆亮)

【参考文献】

三尾 功 『近世都市和歌山の研究』 思文閣 1994 年

『史跡和歌山城 御橋廊下復元及び二之丸西部・西之 丸第一期整備報告書』 和歌山市まちづくり推進室和 歌山城管理事務所 2007年

『史跡和歌山城 石垣保存修理報告書』和歌山市産業 部和歌山城管理事務所 1999年

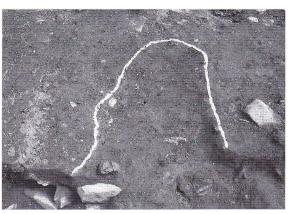


写真13 2-2区第2遺構面土坑6(西から)

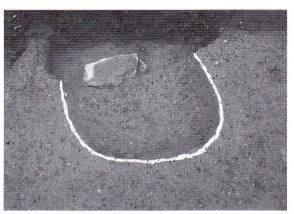


写真14 2-2区第1遺構面土坑4(西から)

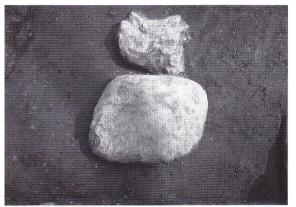


写真15 2-2区第1遺構面礎石(西から)

8. 田屋遺跡 第2次調查

調 査 地 和歌山市直川326 - 7 · 9 · 10地内 調査面積 201.25㎡

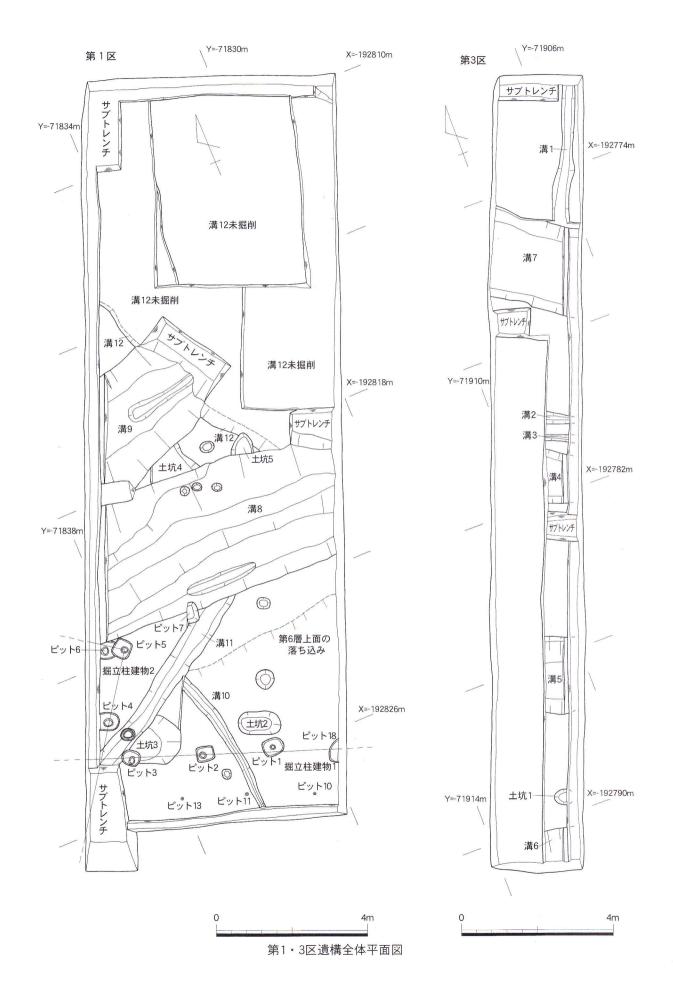
位置と環境

今回の調査地は阪和自動車道と紀ノ川が交差する北側約400m、阪和自動車道の西側下に位置する。調査地周辺は現在、和歌山北インターチェンジ建設による大規模な造成のため旧状が失われつつあるものの、以前は紀ノ川北岸堤防下の広大な水田地帯に相当する。

当地域は紀ノ川の氾濫原とみられていたが、今後の開発計画に対応するため、平成17年に和歌山市教育委員会から委託を受け(財)和歌山市文化体育振興事業団が埋蔵文化財の有無を確認する目的で試掘調査を行った。この試掘調査範囲は今回の調査地も含み、さらに六箇井用水路の南側一帯を対象とした広範囲にわたるもので、当調査地には第1区、六箇井用水路の南側一帯には第2・3区が設定され行われた。その結果、六箇井用水路の南側一帯は紀ノ川の氾濫原であったものの、今回の調査地に設けられた第1区では、奈良時代から平安時代にかけての溝や自然流路が確認されている。この調査結果を受けて、和歌山県教育委員会は田屋遺跡の範囲拡張を行い、現在調査地周辺は田屋遺跡の範囲内である。その後、平成20年には和歌山市教育委員会によって確認調査が行われており、今回の調査における第1区西端において溝などが確認されている。

田屋遺跡は、標高約5.0mの沖積平野に立地する弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡であり、本調査地から阪和自動車道を隔てた東側の一般国道24号バイパス関連の調査によって弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴建物約50棟のほか、掘立柱建物や溝、旧河道、平安時代の掘立柱建物などが検出されている。





調査内容

今回の調査は、開発計画範囲を対象とし東から第 1~3区の合計3ヶ所に調査区を設けた。調査面積 は合計201.25㎡である。

調査地の基本層序は、現表土として造成土が堆積しており、この造成土を除去した下面が現代の耕作土(第1層)となる(写真1・2)。第2・3層は、暗灰黄色から灰黄褐色の細砂混シルトである。第4層は、黄褐色の粗砂混シルトであり、第1区では認められず第2区では粘質土となる。第6層は第1区ではにぶい黄褐色の細砂混シルトであり、第2区ではにぶい黄褐色の半砂混シルトであり、第2区では灰色から暗オリーブ色系のシルト及び粘土となる。さらに第7層は、明黄褐色またはにぶい黄色のシルトであり、第2区では確認できなかった(写真8)。また第8層は、第1区SD-12の遺構壁面において確認した暗緑灰色の細砂である。これら第7・8層は無遺物層である。

遺構は、第1・3区第7層上面及び第3区第6層 上面において検出した(写真2~7)。まず第7層上 面では、古墳時代前期から平安時代前期にかけての 掘立柱建物や土坑及び溝などを検出し、第3区第6 層上面では平安時代の溝を検出した。第2区では、 遺構を確認することができなかった。第3区第6層 上面の標高は、調査区北端部で約4.7m、南端部で約 4.3mを測る。また第7層上面の遺構検出面の標高 は第1区で約4.8m、第3区で約4.2mを測る。

第1区では、第7層上面において古墳時代前期のものとみられる溝11及び土坑3・4、古墳時代中期の掘立柱建物1・2、古墳時代後期に埋没した溝8・9のほか、平安時代前期に埋没した溝12及び、遺構の重複関係から奈良時代から平安時代のものとみられるピット7などを検出した。掘立柱建物1は、ピット1~3・18で構成される建物で北側柱列を検出した。柱間の間尺は約1.9mを測る。またその方向性はW-19°-Nである。掘立柱建物2はピット4・5で構成される建物で、東側柱列を検出した。

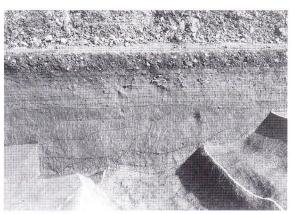


写真1 第1区東壁溝8・12付近土層堆積状況(西から)

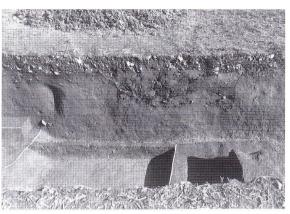


写真2 第3区東壁溝7付近土層堆積状況(西から)

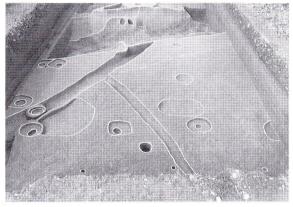


写真3 第1区掘立柱建物1(南西から)

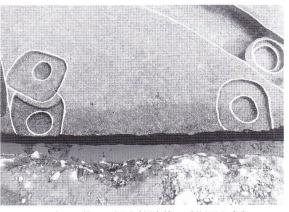


写真4 第1区掘立柱建物2(北西から)

柱間の間尺は約1.9mである。またその方向性は、N-35°-Wである。溝8は幅約3.5m、深さは約1.0mを測もので、遺構覆土はにぶい黄褐色系の細砂混シルトであり、土層堆積状況を観察した結果、少なくとも3回の再掘削が行われている(写真5・6)。溝9は幅約2.7m、深さは約75cmを測るもので、遺構覆土はにぶい黄橙色系の細砂混シルトである(写真7)。溝12は調査区北半部で検出した大溝であり、西側肩部を検出したものの東側肩部は調査区外となる。その規模は幅約9.0m、深さは検出面から1.8m以上を測る。

第3区では、第7層上面において古墳時代のもの とみられる溝2~6及び土坑1、平安時代前期のも のとみられる溝7を検出した。また第6層上面で は、平安時代のものと考えられる溝1を検出した。

溝7は幅2.2m、深さは検出面から約30cmを測る。 遺構覆土は単一の褐灰色粗砂混シルトである。溝1 は幅25~50cm、深さは検出面から約40cmを測る。遺 構覆土は単一の黒褐色粗砂混シルトである。時期に ついては出土遺物から平安時代のものと考えられる。

遺物には、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・中世土師器・銭貨がある。そのなかでも特筆するべきものとしては、第3区第3層から出土した北宋銭の『景徳元寶』1枚、また同じく第3区第6層から出土した平安時代前期の黒色土器や土師器台付皿などがある。

まとめ

今回の調査成果としては、紀ノ川の氾濫原と考えられていた調査地周辺が古墳時代前期から平安時代前期の集落域であること、またその範囲は調査対象地の北側にのびることが明らかとなった。

注目すべき遺構としては、第1区北半部において 検出した大溝12がある。調査地周辺では国府と推定 される府中遺跡のほか、平安時代の遺構及び遺物が 多数分布している。よってこの大溝の性格として は、これらの国府に関連する施設へ物資を運搬する ために掘削された運河と考えることもできる。

(藤藪勝則)



写真5 第1区溝8・9 (東から)

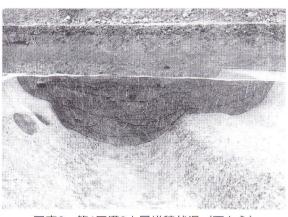


写真6 第1区溝8土層堆積状況(西から)

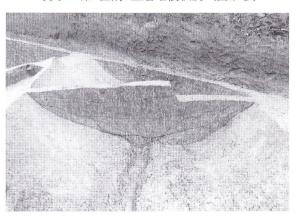


写真7 第1区溝9土層堆積状況(東から)



写真8 第2区全景(南から)

9. 釜山古墳確認調查

調 査 地 和歌山市梅原299-1番地・木ノ本699番地 調査面積 46㎡

位置と環境

和歌山市域の北西部にあたる和歌山市梅原及び木ノ本に所在する釜山古墳は、紀ノ川北岸の標高 5.5m前後の紀ノ川によって形成された大規模な砂堆の背後に残された平野部に存在する。この古墳が含まれる釜山古墳群(遺跡番号44)にはこれまで3基の古墳が確認されている。今回の調査対象である釜山古墳は、古墳群の中で最も東側に位置する直径約40m、高さ約7mの円墳として知られている(写真1)。また、この釜山古墳群を含む周囲は土師器・須恵器などが散布する木ノ本Ⅲ遺跡(遺跡番号42)としても周知されており、調査地は木ノ本Ⅲ遺跡の中央部としても位置づけられる。今回の調査地は釜山古墳の周濠内部に位置するものと想定されたことから釜山古墳確認調査として実施したものである。

調査内容

調査は、釜山古墳の周囲における未開発地を対象として2区画の敷地に調査区を3ヶ所設定して行った。まず第1区は古墳東側の造成地に設定した調査区で、約1.5mの盛土を上端幅8m四方の範囲で除去し、その底面に幅1.5m、長さ4.0mの調査区を設定した。第2・3区は古墳西側の畑地に設定した調査区で、第2区は東西8.0m、第3区は東西18.7mで、ともに幅1.5mの調査区である。

調査地の基本層序は、各調査区とも大まかな対応関係が認められる。耕作土(第1層)以下の状況は、同じく耕作層と考えられる第2層があり、その下に江戸時代の堆積層と考えられる厚さ25cm



調査位置図(数字番号は調査地区番号を示す。)

のにぶい黄褐色系の細砂(第3層)が堆積する。第4層も厚さ20cmのにぶい黄褐色系の細砂で鎌倉時代以降の堆積層と考えられる。そして、第5層は周濠内部の堆積と考えられる土層で、2~3単位に細分できる。さらに、第6層は黄灰色の細砂で遺物の出土は認められず、周濠底面の可能性が高い。

古墳の東側にあたる第1区では集石などの遺構は検出できなかった。しかし、調査区全体が周濠内部に収まるものとみられ、周濠底面の確認ができた。検出した周濠底面は水平ではなく部分的にやや深くなる様相を示し、底面の標高は、1.4~1.5m程度である。

古墳の北西側にあたる第2・3区では共通する 堆積を示し、第4層掘削後、第3区において集石 遺構を確認し、さらに第5層を掘削することに よって外堤葺石を確認した(写真2・3)。集石遺 構は第5層内に結晶片岩1点を含む10cm 程度の 砂岩割石がまとまって検出できたもので、今回の 調査状況でのみ考えられるのは古墳墳丘葺石の転 石がまとまって検出できた可能性が高い。また北 半部において検出した外堤葺石は、10~30cm程度 の砂岩割石を積み上げた状況で確認したもので、 傾斜角度約28度で濠底に向かう。

今回の調査で出土した遺物は、土師器、須恵器、 瓦器、中世土師器、輸入陶磁器、焼締陶器、肥前 陶磁器、土製品、瓦、石器などがあり、古墳に伴 う埴輪片が一定量出土した。

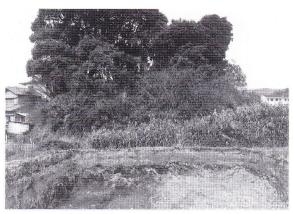


写真1 釜山古墳近景(第1区から)

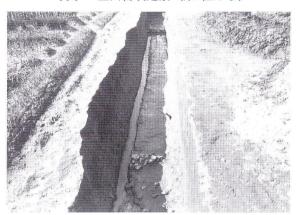


写真2 第3区全景(南東から)

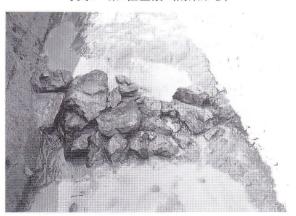


写真3 第3区外堤葺石(南東から)

まとめ

今回の調査における最大の成果はその目的であった釜山古墳に関する遺構の検出にあるといえる。特に第3区では、外堤部の葺石と傾斜角度、推定ではあるものの古墳周濠底面の標高及び残存周濠上端幅を確認した。また第1・2区においてもその両者が標高的にみて古墳周濠内部であることが確認できた。その成果から古墳の規模を計測すると墳丘裾部までの全長が52m、残存外堤までの全長が72mとなり、第1区の様相からみるとさらに大きくなる可能性も考えられる。

(井馬好英)

【参考文献】『和歌山市内遺跡発掘調査概報 - 平成20年度 - 』 和歌山市教育委員会 2010年

Ⅲ. 普及啓発活動

1. 書籍刊行

埋蔵文化財の発掘調査報告書を刊行し、関係機関等へ配布した(平成21年3月)。 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報 - 平成18年度(2006年度)- 』

発掘調査報告書の原稿を提出した。

『和歌山市内遺跡発掘調査概報 - 平成19年度 - 』(平成21年3月) 和歌山市教育委員会発行

2. 現地説明会等の開催

川永小学校教員及び小学6年生を対象とした現地説明会を実施した。 川辺遺跡第9次発掘調査現地説明会 平成20年5月21日(水) 参加者 約60名

中之島小学校教員及び小学6年生を対象とした現地説明会を実施した。 太田・黒田遺跡第61次発掘調査現地説明会 平成20年10月18日(土) 参加者 13名

3. 講師派遣等

財団法人和歌山県文化財センター主催の報告会に講師を派遣した。 『地宝のひびき -第3回和歌山県内文化財調査報告会-』 平成20年7月20日 和歌山県立図書館(きのくに志学館) 派遣職員 北野隆亮 「太田・黒田遺跡の発掘調査」

川永地区公民館主催の報告会に講師を派遣した。

『川辺遺跡学習会』

平成21年2月25日 和歌山市役所川永支所

派遣職員 井馬好英 「川辺遺跡の発掘調査」

平成23年3月15日

和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報

-平成20年度(2008年度)-

編集·発行 財団法人 和歌山市都市整備公社 和歌山市西汀丁36番地

印 刷 株式会社ウイング

©財団法人 和歌山市都市整備公社